

美唄農場の歴史

未開地開墾の構想

一人の若者が、開墾の使命と希望を胸に、笹やぶと巨木に覆われた未開地を見渡していた。その若者、石戸谷弥三蔵は、洋式農業による農場経営を実現しようと、自ら願い出て、青森県弘前から北海道石狩国空知郡沼貝村（現美唄市）に赴いた。明治 29 年（1896 年）、ここに美唄（びばい）農場が開かれる。

この農場開設を構想した菊池九郎（1847－1926）は、弘前藩士、菊池新太郎の長男として弘前城下に生まれ、藩校、稽古館に学んだ後、藩の書院番、小姓組をつとめる。戊辰戦争では、勤王側に転じた藩に抗して本多庸一¹らと奥羽越列藩同盟に奔走。脱藩して、青森、函館、仙台を経て庄内に至り切腹を図るが庄内藩士に止められ思い止まる。その後、脱藩を許され帰藩し、函館戦争に従軍。

明治 2 年（1869 年）、藩主に従って上京し、洋学の最高峰といわれていた慶應義塾（後の慶應義塾大学）に入る。翌年、藩命により鹿児島に留学。明治 10 年（1877 年）、西南の役が勃発するや、政府の徴募に応じ、同志を募り上京したが、役は終結し、帰郷。弘前出発の前夜にキリスト教の洗礼を受ける。後に青森県議会議員、初代弘前市長、衆議院議員（第 1 回衆議院議員選挙で当選し、以来連続 9 回当選）、山形県知事、農商務省農務局長を歴任した後、再度、弘前市長に就く。また、新聞社、東奥日報社を創立し初代社長になるなど、怒涛の人生を送った明治期の偉人である。

その菊池がなぜ、未開の北海道の地に農場を拓こうとしたのか。また、その場所を選んだ経緯はどのようなものだったのか。



中央が菊池九郎。左が吉川泰次郎、右が本多庸一『東奥義塾再興十年史』（東奥義塾図書館所蔵）より

東奥義塾の歴史

菊池は、明治5年（1872年）、有志とともに青森県弘前に私立学校、東奥義塾を開く。その前身は、藩校、稽古館である。藩校の伝統を受け継ぎつつ、慶應義塾を範とし、小学科を付属にもつ私立の外国語学校として、英語教育に力を入れる。明治6年（1873年）には、東北地方初の米人英学教師を招聘。明治8年（1875年）には小学科女子部を設け、明治11年（1878年）に中学校、明治15年（1882年）に専門学校（文学専門科・予科、法学部専門科・予備科）、明治20年（1887年）には高等普通学科へと改組。明治29年（1896年）に尋常中学校となる。

その後、経営状況が逼迫し、明治34年（1901年）、市に移管され、弘前市立弘前中学東奥義塾に、明治43年（1910年）には県に移管され、青森県立弘前中学東奥義塾になり、大正2年（1913年）、廃校。

大正11年（1922年）、ジョン・ウェスレー² 宣教100年を記念して、米国メソジスト教会とその関係者の協力により、東奥義塾の再興を果たす。

現在、東奥義塾中学校、東奥義塾高等学校において、「敬神愛人」を校訓とするキリスト教教育を重点に特色ある教育を進めている。

東奥義塾の財産形成

東奥義塾は、旧藩主である津軽承昭（つぐあきら）公から毎年3千円の補助を受けることが明治7年（1874年）に決定されたが³、明治15年（1882年）、補助は廃止され、翌年、一時金1万円を下賜され⁴、津軽家からの財政支援は断たれた。以後の経営状況は相当に厳しく、資金の確保は大きな課題となった。

そこで、東奥義塾結社人9人（菊池九郎、本多庸一、蒲田廣、芹川得一、武田邦雄、小笠原精一、鎌田文次郎、中館広之助、石戸谷弥三蔵⁵）は、学校経営に充てる資金を得るための基本財産をつくろうと計画を練り、明治28年（1895年）にその計画をまとめた。

農場に関しては、明治11年に青森県下の各学校に学田貸下げが行われ、東奥義塾にも5反余の開墾地貸下げがあり、東奥義塾では更に10反余の土地を購入して開田している。翌明治12年（1879年）には、津軽承昭公が学田として17町6畝12歩を寄贈。この学田から収穫される米穀代を東奥義塾の経営費に充てていたのである。

また、明治14年（1881年）には、日進堂という印刷所を買い取り、その収益を学校経営費に充てた。同社が発行していた「青森新聞」も引継ぎ、一旦廃刊となるが、明治21年（1888年）、菊池九郎により「東奥日報」として再興される。

明治27年（1884年）には、北津軽郡板柳村（現板柳町）のりんご園9町6反歩を学校財産として購入している。これも、その収益を学校経営に充てるためであった⁶。

明治32年（1899年）2月には、財政難に瀕している経営の維持方法について協議するため、津軽5郡2市の有志を招き協議をしている。

明治33年度、弘前市からの補助金4,500円、明治34年度、青森県からの補助金3,000円が議決されたが、前述のように明治34年には弘前市に、その後、青森県に移管となる。

農場開設場所の選定

沼貝村という場所に関しては、農場の適地として、事前に情報を得ていたのだろうか。

菊池は、明治26年（1893年）に北海道を視察旅行していた。新天地の開発に大きな関心を持ち、その開発方法についても研究したといわれている。

この年7月19日、東奥義塾創立者の一人である代議士、榊喜洋芽（さかき きよめ）⁷が一

足早く函館入り。7月29日、同じく代議士となっていた菊池と合流。8月14日帰着までの間、森→室蘭→札幌→小樽→増毛→雨竜→空知太→砂川→岩見沢→室蘭→森→函館とまわった⁸。

砂川―岩見沢間に位置する沼貝村の美唄停車場は、明治24年(1891年)7月の開業。菊池、榊の二人は、このとき、美唄停車場を通過している。したがって、後に美唄農場を開く場所には行っていない。また、鉄路から距離があるため車窓からその場所を目にすることもなかったであろう。では、農場の候補地をどのように知ることができたのか。

なお、この視察旅行ののち、菊池は東奥日報に「北海所見」と題し寄稿し、同年8月30日、31日の両日、掲載された。この中で、室蘭港について、石炭積出港としての重要性を確認し、軍港としては防御に難があるため不適であり、商港とすべきであると論じている。

更に、北海道の移住民のための食料を確保することが肝要であり、漁業は漁獲が不安定であるため、農業に立脚すべきであるとしている。しかし、廉価な産物を売り、高価な米穀を本州から移入しては、いつまでも窮乏にあえぐこととなるから、個々人に任せるのではなく、道庁が道内産物の調理法を研究し、食べやすく滋養摂取が可能となるよう、食物の改革を進めるべきであると説き、北海道幾百年の長計をもって北海道長官自らが指揮を執り、北海道拓殖の大任を全うすべきであると論じるなど、北海道農業について熱く語り、檄を飛ばす。北海道開拓を自らの手で実践し成功させたいという密かならざる意気込みを感じさせるが、北海道の実情をつぶさに視察したからこそ、菊池の中に壮大なビジョンが生まれていたのではなかったか。

北海道未開地の貸下・払下制度と農場候補地の選定

北海道の土地の貸下や払下は、どのように行われたのか、当時の制度を見てみよう⁹。

明治2年(1869年)7月、北海道開拓使が置かれる。明治15年(1882年)2月、開拓使を廃し、函館、札幌、根室の3県が置かれる。明治19年(1886年)1月、3県を廃し、北海道庁が置かれ、本格的な北海道開拓が始まる。

まず、道庁は、北海道への移民を進め、開拓を促すため、同年6月、北海道土地払下規則を制定する。この規則によると、土地の処分過程は、貸下出願・貸下・成功検査・払下の4段階で進めることとなっていた。土地払下希望者は、願書に地名・坪数・事業・目的・着手の順序・成功の程度を記入し、耕宅地を事業目的とする者は、開墾する土地を各年に配分し、成功期限を記載することとされていた。貸下期限は、10年以内とし、その期限については土地及び事業の難易により定め、成功した貸下地は、一律に千坪につき1円の代価で払下られ、地租及び地方税は払下後10年間免除された。

同年8月から殖民地選定事業が開始され、明治22年(1889年)までの間に全道の主要な原野の選定が行われた。明治23年(1890年)以降は小原野及び千島の殖民地選定がなされ、殖民地撰定原図と報文が作成された。報文には、原野の地形的状況・土性・動植物・気候など自然的条件が概説された。選定された土地の多くは、区画が測設され、希望者に貸下げられた。

区画地は公告されることとされ、明治26年(1893年)3月に渡島・日高両国の全域、後志・胆振国の大部分、石狩国の大部分、明治29年(1896年)7月には後志・胆振両国の全域、翌明治30年(1897年)2月には前記5か国全域、同年12月には、十勝・釧路・北見・天塩各国の大部分に拡張し、明治34年(1901年)には十勝・釧路両国の全域が公告された。

明治25年(1892年)12月には、府県からの移民を保護奨励するために、戸数30戸以上の集団で1か年に10戸ずつ移住する場合には、1戸につき1万5000坪の貸下地を3か年あら

かじめ用意する貸付地予定存置の特典を用意した。この予定存置の対象となるものは、上記30戸以上の団結（集団）移住者のほかに、小作農場経営主も含まれていた。

その後、明治30年（1897年）、北海道国有未開地処分法が制定された。土地払下規則と比較すると、開墾地等が無償貸下・有償払下から無償貸付・無償付与に変更されたこと、処分面積の制限が拡大されたこと（1人10万坪以内→開墾地150万坪以内、牧畜地250万坪以内、植樹地200万坪以内、会社・組合などの場合はそれぞれ2倍まで等）などの変更点があった。

殖民地に関する情報については、道庁が「北海道農業手引草」「北海道移住案内」「北海道移住問答」などの冊子を発行して府県の関係機関等に送付したり、民間でも手引書が発行され、新聞紙上でも殖民地の紹介が行われるなどした。

以上のことを総合すると、菊池は、現地あるいは現地付近を目にしたのではなく、道庁による未開地の区画地公告や関連刊行物、あるいは新聞等に掲載された情報などを目にして選定した可能性が高いのではないかとと思われる。

しかし、一方で、「団結移住ニ関スル要領」（明治26年5月10日北海道庁内務部第12140号所収明治25年12月22日北海道庁長官から各府県知事宛文書（北海道立文書館所蔵））では、団結（集団）移住をする場合及び小作農場経営主には、あらかじめ1、2名の出張員に現地視察をさせ、道庁からの説明を受けてから、国有未開地の貸下願書を提出するよう示している。これにより、貸下希望者は、願書に記入する地名や坪数・配当地積・起業方法などを決めることとなる。

美培農場の場合、先行して出張員が現地視察をしたのかどうかの記録は残っていない。

美培農場の土地は、明治29年（1896年）に道庁より、美唄及び茶志内にまたがり86万821坪の貸下を受け¹⁰、翌明治30年には、更に8万4357坪の貸下を受け、合計94万5178坪（約315町歩、約312ha）となり、本農場のほかに茶志内支場もあった。このうち、最終的に払下が確定した面積は、畑と牧場を合わせて87万869坪（243町4反4畝5歩、約287ha）であった¹¹。

石戸谷弥三蔵 未開地に立つ

冒頭に戻り、美培農場がたどった経過を見ていこう。

開墾計画に基づき現地に赴いたのは、東奥義塾教師の石戸谷弥三蔵であった。



石戸谷弥三蔵
「菊池九郎の北海道開拓」
（東奥義塾図書館所蔵）より

「菊池九郎の北海道開拓」¹²では、石戸谷の経歴と人となりを次のように紹介している。

「東奥義塾卒業後慶應義塾に学び、英語数学に優れ、弁論を好んだ、自由民権を主張して理路整然、常に書生運動の先頭に立って指導した。興至れば美声にして音吐朗々、英語の歌を得意とし、当時の慶應寮歌の作詞作曲は彼の傑作と云われる。福沢諭吉先生は彼の才能を特に愛し、その四女辰の婿にと懇望されたが、本人は固辞している。その深い理由は明らかでないが、案外昔堅気な気質があったのではなかろうか。慶應義塾卒業後菊池先生に招かれて母校東奥義塾の教師となって後輩の教育指導に当った」。

その石戸谷は、明治29年3月、東奥義塾の期待を一身に背負い、北海道に渡った。妻と何人かの農民も一緒だったようだが、正確な記録は残っていない。北海道での上陸地は小樽か室蘭かは明らかではないが、江別からは蒸気船で石狩川をさ

かのぼり、月形に上陸し、そこから渡船で対岸の沼貝村に渡ったと思われる。石狩川は当時、月形の市街地付近で西側に蛇行しており、樺戸集治監¹³ 近くに「監獄波止場」と呼ばれる蒸気船の船着き場があった¹⁴。そのやや上流に私設の渡船場があり、現在の美唄市西美唄町山形と行き来していた¹⁵。

沼貝村は、この6年前の明治23年（1890年）に開村している。現在の同市西美唄町山形には、明治27年（1894年）4月に山形県から16戸が入植。同月、中村農場の開拓先発隊24戸が三重県から現在の同市西美唄町元村に入植。石狩川から美唄市街までは、低湿地帯・泥炭地が広がり、道はなかった。山形県からの入植者は、美唄市街に出るには、やぶを分けて美唄川にたどり着き、川に沿って進んで、その先の道路に出てようやく市街にたどり着いたという¹⁶。石戸谷らも2メートルを超える笹を伐り開きながら進み、途中、散在する入植者の小屋などは見えなかったかもしれない。現在の国道12号に当たる上川道路が明治23年6月、岩見沢―空知太間で開通していたので、これを横断して、目的地にたどりついたと思われる。上川道路の両側には、屯田騎兵隊が入植していた。屯田兵は、明治24年（1891年）から明治27年にかけて、美唄兵村に騎兵隊160戸、高志内（光珠内）兵村に砲兵隊120戸、茶志内兵村に工兵隊120戸が入植。石戸谷一行は、美唄兵村を通り、その東にある練兵場までは道があったようである。到着場所は、資料がなく特定できないものの、後に農場事務所が置かれる後掲「農業経営並着手順序配当図」の表示区画（三）付近ではないかと推測される。

到着した場所は、見渡す限り笹と巨木で埋め尽くされた手つかずの原生林。石戸谷一行は、しばらくは言葉もなく立ちつくすが、やがて開拓への闘志をみなぎらせていったのではない。休む間もなく、やらなければならないことがある。自分たちの住居づくりである。平坦な場所を探し、近くの木を伐り倒して柱をつくり、笹を編んで外囲いの屋根として掘立小屋をつくった。その後、農場内の道路の開削や事務所の建設にもあたった。

開墾作業には、十分な道具もなく、巨木の伐採や鉄の網のように地面を覆う笹の根の除去など困難を極め、更にヒグマとの遭遇や蛇、蚊などの襲来、イモやカボチャなどの偏食による栄養失調や脚気、火山灰による酸性の強い土壌での乏しい収穫、冬には豪雪と厳しい寒気など、筆舌に尽くしがたい幾多の苦難に直面しながらの開墾生活であった。

美唄農場の初年の小作人は10戸とされている。一家に2人以上の労働者がいること、5町歩を貸与し、毎年1町から2町ずつ開墾すること、必ず10年間開墾に従事することなどが定められていた¹⁷。小作人には、小屋掛料、農具、種子料など1戸につき15円と新墾料として1反につき3円が農場主から給与され、収穫期までの食料、その他の生活費も貸与され、開墾後3年間は鍬下年期として小作料は免除されるなど、比較的保護されていた。

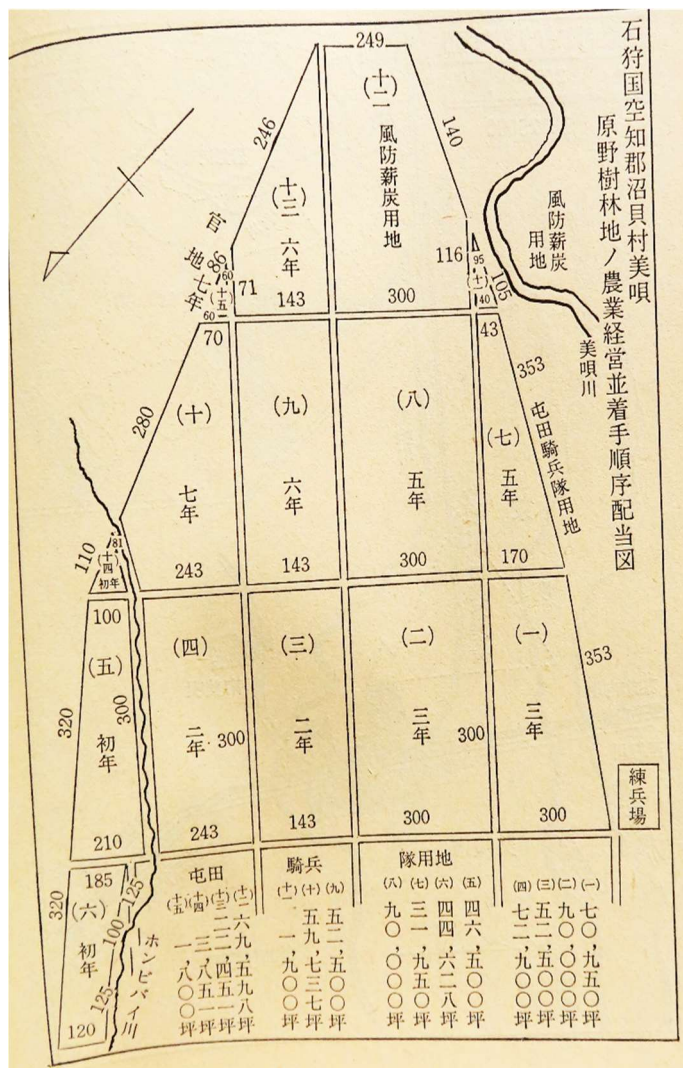
初年の小作人については、「葵農場¹⁸に幾春別の炭坑夫が入りたるが、十分前金を借入れて退場を申入れの際、或人が石戸谷氏より周旋料をとりて、10戸を入場せしめたるものにして、真正の小作人は只1戸（山本）のみ、他は坑夫の就農者にして、浮浪の態度なり」と評され、その後の小作人も他の農場から急遽入って来た者が多く、借金を重ね、互いにけんかし、果ては、小作権を譲渡したり、逃亡する者が出るなど、開墾どころではなく、管理人の苦悩と心痛を深めた¹⁹。

開墾計画（起業方法書）は、開墾設計書や収支決算予定表などからなり、開墾設計書の年次計画では、下表のようになっており、後に同表下段のように修正されている。

配当地積

年次	初年	二年	三年	四年	五年	六年	七年
当初坪数	94.978	125.400	160.950	149.557	121.950	74.951	61.537
変更後	明治 30 年	31 年	32 年	33 年	34 年	35 年	36 年
変更後坪数	94.978	125.400	45.000	149.557	60.000	74.951	61.237

当初の新規開墾坪数は、合計で 789.323 坪、修正後は 1 年遅れで 611.123 坪となっており、178.200 坪減っているのは、後に畑地を牧場に変更したためである。このほかに風除致薪炭用等存置分（風防薪炭用地）71,498 坪があった。収支決算予定表では、開墾開始 3 年目からは小作料収入が見込まれ、7 年目で収支黒字を達成し、以降、益金を増やしていく予定であった²⁰。しかし、実際には、収入は少なく、経費は超過累増した。陣頭指揮にあたっていた石戸谷は、無理な労働と慣れない生活から病を得て、明治 30 年（1897 年）2 月、弘前に帰って間もなく、31 歳の若さで他界した。同年 4 月の東奥義塾の在籍職員の中に石戸谷の名を見ることができる²¹ので、亡くなったのは 4 月以降のことと思われる。



現在の美唄市東明地区から癸巳町奔美唄にまたがる未開地を 15 区画に分け、風防薪炭用地を除き、7 年間で開墾する計画だった。

「菊池九郎の北海道開拓」
（東奥義塾図書館所蔵）より
農業経営並着手順序配当図

新たな管理人 武田功

明治 29 年（1896 年）11 月、武田功（1864—1953）が美培農場の管理人となる。武田は、菊池同様、弘前藩士を父に持ち、東奥義塾、県立専門学校に学んだ後、弘前中学校に奉職。明治 20 年（1887 年）、小笠原島に移住。明治 23 年（1890 年）、北海道に渡り、江別近辺や岩見沢・志文などで農業に従事。明治 29 年に石戸谷と出会い、同じ東奥義塾出身ということから、美培農場の管理人を奨められる。

石戸谷から管理を引き継いだ武田は、農場の 3 分の 1 程度が「黒ぼこ地」といわれる腐植土の強酸性土壌であることから、耕地としては不適と考え、道庁に願い出て明治 32 年（1899 年）1 月に牧場としての許可を得る。はじめに馬 3 頭を土地の者から借り、徐々に頭数を増やし、明治 34 年（1901 年）からは、乳牛も飼育するよう



武田 功
「沼貝村記念写真帖」
（美唄市郷土史料館所蔵）より

になると、牧場は徐々に広がりを見せた。搾乳業の許可を受けて畜舎を新築して牛乳販売業を始め、当初は「未だ収支相償はず」であったものの、明治 41 年（1908 年）には「漸次収支相償うべき計画にすすみつつあり」となっていく。大正 5 年（1916 年）の帝室林野管理局札幌市局からの調査依頼に対して、武田は牧場に関する項目で、牝牛 24 頭、種牛 1 頭、小作には 40 余頭を飼養させていると報告している²²。

美培農場に関する記録の大半は、昭和 17 年（1942 年）、旧農場事務所が火災に遭い全焼したため失われ、残された書類をもとに武田の手で覚書がまとめられた。その中から大野文雄氏が『新しののめの里』に採録しているところでは、小作人の戸数は、当初 10 戸、明治 44 年（1911 年）には 39 戸、後述する農場の処分・解放時には 51 戸となっている。

明治 35 年（1902 年）に至り、経営は行き詰まり、美培農場は、伯爵津軽承昭に譲渡された。以後、美培農場は、「津軽農場」とも呼ばれるようになる。この前年に、東奥義塾は弘前市に移管されている。農場の益金を東奥義塾の経営に充てるという当初の目的は、かなわぬものとなった。

経営譲渡は、前述の板柳村のりんご園も同様で、東奥義塾が弘前市に移管されると、津軽家の経営となり、後に地元の地主に売り渡された²³。

昭和 3 年（1928 年）、美培農場は、小作人に解放された。農場解放は、昭和 5 年（1930 年）頃までかかり、終了したとき、51 人の小作人たちは、すべて自作農となり²⁴、34 年にわたる美培農場の歴史は閉じられた。

武田は、経営が津軽家に移行後も、管理人として残り、沼貝農会会長、学務委員、村会議員などの要職を歴任し、地域発展の功労者となる。

「美培農場」の命名時期と表記

最後に、「美培農場」の名称と表記について、触れておきたい。

美培農場は、開設当初、所有者²⁵の一人である菊池九郎の名をとって、「菊池農場」と呼ばれていた。美培農場の運営方法を定めた「美培農場規約」により、正式名称が「美培農場」とされる。「菊池九郎の北海道開拓」で斎藤重徳氏は、地名について「当時は美培が正しい」としていたが、大野文雄氏が『新しののめの里』で、当時も「美唄」が常用されていたとその誤りを指摘している。明治 24 年（1891 年）開業時の駅名（停車場名）が「美唄」

であることも、当時すでに「美唄」がこの地域を表す一般的な名称・表記であったことを示している。

では、「美培」の表記は、いつ、どこから来たのか。

『美唄市百年史』では、「開設時の「美培農場規約」によって「美培農場」ともいった」と開設時には「美培農場」の名称が存在したとしている一方、大野氏は前掲書で「武田 功氏が農場所有権移転登記後、関係書類を津軽侯に提出するために上京した折に、爾後の農場名称は「美培農場」とすることを伯爵に裁可を受けて命名したものであることが「武田自叙伝」の中で明記され、農場独自の呼称である」としており、同書に抄録されている「武田功自叙伝」中にも同趣旨の内容が書かれているので、肝心の「美培」とした理由はなぜか語られていないものの、武田が命名し、その時期は農場の所有権が津軽家に移った明治 35 年（1902 年）ということになる。

「美培農場規約」の制定時期は明らかではないが、土地貸下願の提出時である明治 28 年（1895 年）10 月 16 日に願書に添付されていたか、遅くとも、貸下が認可された翌年 2 月 14 日の直後あたりと思われる。明治 26 年（1893 年）2 月に北海道庁が「団結移住規約標準」を作成して各府県に配布しているので、「美培農場規約」はこれに則ってつくられたと思われる。さらに、「国有未開地処分法完結文書 貸付台帳」（北海道立文書館所蔵）には、明治 31 年（1898 年）12 月に土地利用の目的の一部を牧場に変更した際の借地人の代人として「美培農場 武田功」の記載がある。

つまり、明治 35 年以前に「美培農場」の名称が使われていたことになるので、武田は、農場の所有権が津軽家に移ったことを受け、新たな農場名をつけるか、従前の農場名を継続するかの判断を津軽家に仰いだのではなかったか。そうであるならば、この名称は、貸下願書を提出した菊池らが考えた可能性もある。しかし、その由来も命名者も、記録には残っていない。

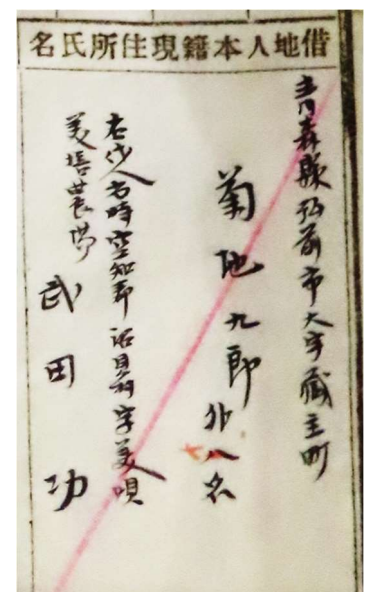
次に表記についてであるが、「美唄」も「美培」も、「ビバイ」と同音だが、「美培」表記の例は、美培農場の小作人からの要望により創建された「美培神社」²⁶ があるほか、この時期、例が見られないことから、大野氏が指摘するように「農場独自の呼称」だったようだ。

「培」の字は、一般的に「栽培」「肥培」などに使われるように、土をふっくらと盛る、つちかう、植物を養い育てるという意味を持つ（『漢語林』大修館書店など）。

「培」の字を当て字ではなく意味を持たせて使ったと考えるならば、「美培」には、農作物の良好な生育や豊かなみのり、そして農場繁栄の願いが込められているように思われる。東奥義塾の安定した経営を支えるための洋式農業を取り入れた農場の実現という菊池らの新天地にかけた壮大なビジョンが潜んでいたのではないかと、深読みしたくなる。

おわりに

基本財産としての農場の収益を東奥義塾の経営に充てるという当初の構想は、うまくいかなかったようである。美培農場を中心としたこの地域はのちに「東明」と呼ばれるようになり、三井、三菱といった大手炭鉱が最盛期期へと向かうにつれ、その入り口に当たるこの地



「国有未開地処分法完結文書 貸付台帳」（北海道立文書館所蔵）より
明治 31 年変更出願時のものを一部拡大

には、徐々に住宅地や学校、工場、公園などがつくられていく。その礎は、美培農場にあった。

昭和 43 年（1968 年）10 月 4 日、常陸宮様ご夫妻が美唄市の誘致企業である日本理化学工業株式会社美唄工場をご視察された。ご視察後、工場近くの東明公園において、記念植樹をされた。そこは、かつて津軽農場（美培農場）があった華子様のご実家、津軽家ゆかりの地であった。宮様ご夫妻は、平成元年（1989 年）9 月 21 日に、北海道で開催された第 44 回国民体育大会（はまなす国体）の卓球会場である美唄市を再訪され、市民の大歓迎を受けられた。

本稿に関する資料調査に際して、大変お世話になった東奥義塾図書館の小松加奈さん、弘前市立図書館調査室のスタッフの皆さん、北海道立文書館、専門主任の正木公一さんに厚く謝意を表します。

美唄市総務課総務係行政資料室 伊藤 敦史

（令和 5 年 2 月 16 日）

注

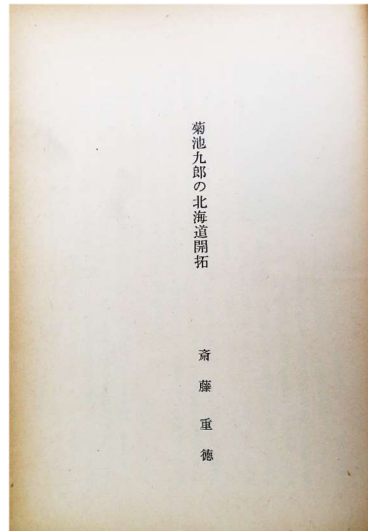
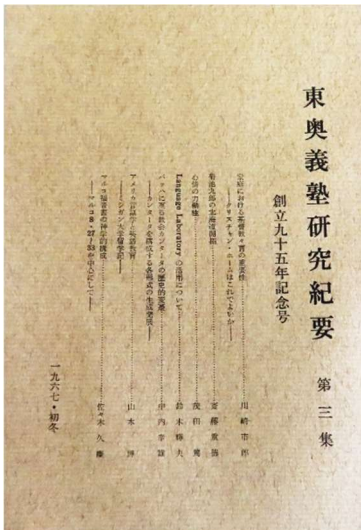
- 1 本多 庸一（ほんだ よういつ、1849－1912 年）弘前藩士、本多八郎左衛門久元の長男として弘前城下在府町に生まれる。幼名を徳蔵。藩校、稽古館に学ぶ。維新後は弘前藩の命令で、英語を学ぶために横浜に留学。受洗し、キリスト者となる。弘前に戻り、廃校となっていた東奥義塾を再興し、塾長を勤める。東北最古のプロテスタント教会である弘前教会をジョン・イングとともに設立し、初代牧師を兼務。日本メソヂスト教会の初代監督。アメリカ留学ののち、青山学院院長に就任。日本メソヂスト教会を設立し、初代監督となる。
- 2 ジョン・ウェスレー（1703－1791）18 世紀のイングランド国教会の司祭。メソヂスト運動と呼ばれる信仰覚醒運動を指導した。この運動から生じたのがメソヂスト派というプロテスタント教会であり、アメリカ・ヨーロッパ、アジアで大きな勢力をもつに至る。特にアメリカのプロテスタント系では信徒数第 2 の教派。
- 3 津軽家からの補助の経過については、『菊池九郎先生小伝』（菊池九郎先生建碑会、昭和 10 年（1935 年））中「旧藩札償却免除斡旋」の項に次のように説明されている。維新の動乱の際、各藩は幕府に届け、又は無届で藩札を発行したが、後にこの無届藩札を大蔵省が引き継いだ藩が多かった中、津軽藩は旧藩主の私債として家禄の内より 5 か年賦ですべて返還することとされた。青森県権大参事奈須均からの秘策を授けられた菊池九郎はかつて鹿児島留学の経験があったことから、明治政府の薩摩閥要人に建策し（大山格之介→大久保利通→大蔵卿 大隈重信（旧佐賀藩））、旧藩札年賦償却は取り止めとなった。これを喜んだ旧藩主、津軽承昭が明治 7 年 12 月より毎年 3 千円を東奥義塾に補助することとなった。
- 4 津軽家からの補助の打ち切りについては、『菊池九郎先生小伝』中「東奥義塾に対する非難」の項に次のように説明されている。東奥義塾では、泰西思想の感化を受け、盛んに自由民権を主張し、キリスト教的色彩が濃厚であり、国体を毀損する危険があると主張する保守官僚らがいた。これを津軽家と縁のある近衛家筋が危惧し、宮内大臣に訴えたが、真相を当時の権力者、岩倉公らに弁明し、ことなきを得た。しかし、旧藩主は、宮内省の意向を憚るなどし、上京中の塾長、本多庸一に補助廃止を伝える。これを聞いて驚いた菊池九郎は、直ちに上京し弁明した。旧藩主は、その理のあるところを認め、補助は廃止するが、一時金 1 万円を与え東奥義塾を永続させる資金とさせた。
- 5 「国有未開地処分法完結文書 貸付台帳」（北海道立文書館所蔵）では、「菊池九郎」は「菊地九郎」と記載さ

の空知線で、岩見沢から室蘭までは室蘭線に乗り換える。室蘭から森までは船で、森から函館までは馬車が廃止されていたので徒歩で移動したのかもしれない。いずれにしても、容易ならざる旅であったと想像される。

増毛駅は、大正 10 年（1921 年）11 月開業。雨竜駅は、昭和 6 年（1931 年）10 月、札沼北線の石狩沼田-中徳富（現新十津川）開通に伴い開業。したがって、明治 26 年（1893 年）時点では、この 2 駅は、未開業。

空知太駅は、砂川駅まで延伸した北海道炭礦鉄道により、明治 25 年（1892 年）2 月開業（明治 31 年（1898 年）7 月 16 日廃止）。ちなみに、明治 28 年（1895 年）9 月に、国木田独歩がこの地を訪れている（『空知川の岸边』）。

- 9 「解説 北海道国有未開地処分法完結文書について その 1」（北海道立文書館所蔵資料目録 3 所収）1988 年による。
- 10 明治 29 年 2 月 14 日認可の借地者名は、菊池九郎、本多庸一、蒲田廣、芹川得一、武田邦雄、小笠原精一、中館廣之助、鎌田文次郎（後に文之助に修正）、石戸谷弥三蔵（後に一郎に修正）の 9 名。このうち、武田邦雄は後に抹消。明治 29 年に東奥義塾の副塾長を辞任したためと思われる。
- 11 東明町開基 100 年記念協賛会『新しののめの里』1995 年、36 頁。
- 12 東奥義塾研究紀要第三集・創立 95 年記念号所収。「菊池九郎の北海道開拓」著者、斎藤重徳氏は、当時、東奥義塾教師。



「菊池九郎の北海道開拓」著者
斎藤重徳氏
（昭和 42 年度東奥義塾卒業アルバム
（東奥義塾図書館所蔵）より）

「菊池九郎の北海道開拓」所収の東奥義塾研究紀要（東奥義塾図書館所蔵）

- 13 宮城集治監、東京集治監に次ぐ国内 3 か所目の集治監として明治 14 年（1881 年）に開庁。佐賀の乱、神風連の乱、西南の役などでの政治犯の収容と北海道の開拓を目的に設置され、大正 8 年（1919 年）に廃監。
- 14 重松一義編著『北海道行刑史』1970 年、135 頁、464 頁。監獄波止場は、明治 17 年（1884 年）、月潟村須倍部太河畔につくられた。樺戸監獄御用商人の大倉汽船（明治 22 年 3 月より石狩川汽船と改名）は「樺戸丸」を江別・月形間に就航させた。
- 15 『月形町史』1985 年、603～604 頁。『山形部落開基 100 年記念誌 拓魂百年』1993 年、18 頁。『元村開基百年記念誌 悠久百年』1993 年、27 頁。
- 16 『山形部落開基 100 年記念誌 拓魂百年』22 頁。
- 17 「菊池九郎の北海道開拓」39 頁「小作人規約」。
- 18 葵農場は、旧前橋藩主で、東京市麴町在住の伯爵松平基則所有の農場。明治 27 年（1894 年）、現在の美唄市西美唄町に開設。
- 19 『新しののめの里』157 頁。石戸谷の跡を継いだ農場管理人、武田功の述懐。

- 20 「菊池九郎の北海道開拓」 35～37 頁。開墾設計書、小作人移住戸数並ニ給与金表、収支決算予定表より。
- 21 笹森順造編『東奥義塾再興十年史』東奥義塾學友會、昭和 6 年（東奥義塾図書館所蔵）、48 頁。
- 22 『新しののめの里』 41、45、47 頁。
- 23 「東奥義塾の研究」 15 頁。
- 24 農地解放の経緯については、『新しののめの里』 32～33 頁に詳しい。要約すると、大正初期の経済不況の波をかぶり華族が株主となっていた十五銀行が破綻。津軽家も被害を受け、現金を捻出する必要に迫られ、津軽家からの依頼を受け美唄町長、桜井良三と小作人代表総代森和平が、美培農場を 12 万 8 千円で売却。この金額は、牧場、小作地、立木の一切を含む代金で、小作人各自支払いの小作料金くらいに相当する格安のものであったので、紛争もなく農地解放が成立した。この経過を武田の子息、綱男氏が書き残していた。
- 25 「美培農場持主規約」第二条に「本農場ハ東奥義塾結社人菊池九郎斎藤璉石戸谷弥三蔵三人ノ共有ニシテ三人同一ノ権利及義務ヲ有スモノトス」とあり、東奥義塾結社人の 3 人が持ち主となっている。前掲『東奥義塾一覽』の結社人には、斎藤璉は入っていないが、注 5<参考>「義塾結社人名」や『東奥義塾再興十年史』の明治 15 年から 20 年に就職した職員の中にその名がある。
- 26 美培神社は、明治 33 年（1900 年）臥牛山山頂に創建。大正 10 年（1921 年）の無格社の統合命令により、御神体を空知神社に合祀され、社殿は天理教我路教会の拝殿となって移設された（『新しののめの里』 59 頁）。

このほか、「ビバイ」の音に「美貝」を充てた例がある（美貝煤田・美貝川）。

また、現在、付近の市道名に「美培線」「美培・球場線」があり、美培農場の名残をとどめている。



弘前公園にある菊池九郎頌徳碑

（2022 年 11 月 19 日 撮影 伊藤）

本稿で紹介する美唄市行政資料室の収蔵資料

- ・「菊池九郎の北海道開拓」 斎藤重徳著
- ・『新しののめの里』 東明町開基 100 年記念協賛会
- ・『山形部落開基 100 年記念誌 拓魂百年』 美唄市山形部落連合会
- ・『元村開基百年記念誌 悠久百年』 元村開基百年記念事業実行委員会